



2

【ひろばの風】

大学の歩み

聖カタリナ大学 副学長
玉井 建三



3

【Campus News】

「北条鹿島まつり」に留学生が参加
読売ジャイアンツVS愛媛マダリンパイレーツ
の試合運営に学生が協力

剣道部 福本さんが全日本女子学生剣道選手権大会に出場
サッカー部監督の就任について（就任会見）

第14回ボランティアウィーク一般公開イベント開催 ほか

4

【Campus News】

キャリアデザインでライフデザイン出張講座を開催
卓球部 長谷川裕也君（保育学科1年）が全国大会優勝
松山まつり「野球拳おどり」で準優勝を受賞
「看護学科の新設」（平成29年4月）について
軟式野球部が秋季リーグ戦で優勝 ほか



5

【ESSAY】

「お父さん先生やなあ。」

保育学科 松谷 和俊



カタリナ ひろば

Vol.29 No.1
2016.11

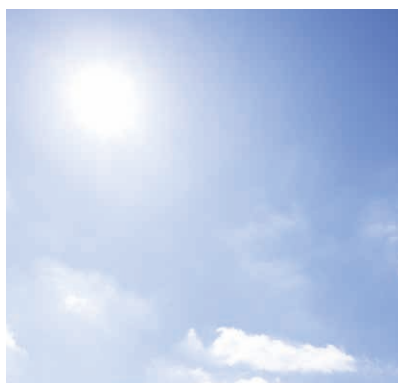
聖カタリナ大学
聖カタリナ大学短期大学部
www.catherine.ac.jp



6

【ゼミナールインタビュー】

人間健康福祉学部
丸山 裕司ゼミ



7

【ようこそ就職課へ】

Challenge to change
～変化への挑戦～

就職課長 井上 尚幸

7

【クラブ紹介】

サッカー部

健康スポーツ学科 3年
木田 航矢さん



8

【教員著書紹介】

第三版 現代の経営管理論

芳地 泰幸（聖カタリナ大学講師）
：学文社 2016年

外国人住民の「非集住地域」の地域特性と生活課題
～結節点としてのカトリック教会・日本語教室・民族学校の視点から～

徳田 剛（聖カタリナ大学教授）
：創風社出版 2016年



大学の歩み

聖カタリナ大学 副学長 玉井 建三

建築中の2号館 平成5年11月8日撮影

大学開学30周年、短期大学部開学50周年を迎え繁栄の道のりを歩んできたことは、設置者の御健闘の足跡を偲ぶと共に、諸先輩のご努力、後援会・同窓会等のご支援、教職員の薫陶の賜と思います。この間に送り出した卒業生は大学3,592名、短大13,015名、短大専攻科音楽専攻197名（平成27年度末現在）を数え、社会の中堅として各分野で活躍されています。

顧みると聖カタリナ女子短期大学は、昭和41年4月、カトリック教会を代表するシエナの聖女カタリナに由来するカトリック系短大として、風光明媚な風早の地に開学しました。その後、昭和63年4月には21世紀の超高齢化社会を予測して、福祉教育と女子教育を大学の根幹とし、社会福祉学部には社会福祉学科を持つ女子単科大学として開学しました。それぞれ研究と高等教育を関連させながら、健康栄養、幼児教育、音楽、社会福祉分野で活躍できる人材を輩出してまいりました。

大学の開学当時は、県外出身の入学者がおよそ6割余りを占めておりましたから、玉井ゼミの野外研修も、愛媛県内の福祉関係の施設、福祉機器製作企業はもとより、県外では広島県、大分県、長野県、東京都などへも脚をのぼして研鑽を積んだことが思い出されます。このため卒業生の活躍の場もカナダや台湾、北海道から沖縄まで、福祉関係を中心に活動されています。またフランスで国際的な難民救援活動を続けていた本学客員教授、学長特別補佐の犬養道子先生（平成9年から12年まで）の指導によって、ボスニアヘルツェゴビナの内戦後の瓦礫処理への参加。鳥取大学乾燥地研究センターの遠山柁雄先生とポプラの苗木を中国ゴビ沙漠に植林するなど、国際ボランティアとしてもゼミ生が精力的に活動をしました。

女子大学のころは一貫した女子教育に対する主体性と独自性を発揮し、隣人を大切にする心をもった全人教育を実施することに全力を傾注してまいりましたが、21世紀の男女平等参画社会に向けて大学の使命を堅持し発展させるために、それまでの女子大学・女子短期大学を平成16年4月に男女共学とし、大学の名称も「聖カタリナ大学・聖カタリナ大学短期大学部」に変更しました。この時期から県内出身のゼミ生が多くなり、県外への研修見学も実施しなくなりました。

その後大学は社会福祉学部を廃止し、社会から愛され信頼

される大学に組織体制を整備する目的で人間健康福祉学部を設置し社会福祉学科、人間社会学科、健康スポーツ学科の3学科を置き、また短期大学部は音楽科（平成14年）と健康栄養学科（平成22年）を廃止して保育学科のみにしました。このような勇気ある組織改編を恒常的に行ってきたことによって、人間の心理や行動、心と身体、健康、地域社会に貢献できる福祉・介護・保育といった専門性と学生一人ひとりの個性を尊重するカトリック教育の理念を備えた知性豊かな人材を養成してまいりました。社会の発展を支える教育研究成果を社会へ還元するために、今後も学長の教育方針のもと、専門領域で活躍しうる人材の育成に大学教職員が丸となって邁進しなければなりません。

聖カタリナ女子大学開学と同時に奉職して約30年。当時大学正門から続く椰子や楠などの常緑樹は根株の若い樹でしたが、いまや照葉樹のトンネルをつくり、深い森の葉づれの音が聞えるまでになりました。ナンジャモンジャの樹も枝をひろげ大きな幹をみせ、4月の学園創立記念日のころには見事な純白の花を咲かせるまでに生長しました。

どこの場所においても自然の恵みは公平だと思いがちですが、当時この一画はまだまだ若木が植えられただけの殺風景な場所でした。しかし、その植込みのなかに「バードゲージ」（現在の法人本部棟「聖カタリナ館」）があり、100羽余りの小鳥が飼育されていて、実に良い音色で学生や教職員、幼稚園児に語りかけ心が和みました。また、正面玄関までの通路側には四季折々の草花が年中咲き乱れているせいか、あまり疎林の感じはしませんでした。この一画の整備は初代理事長の上妻久恵先生から2代理事長の中田婦美子先生へと受け継がれて、今や校風をも感じさせる杜となっています。

国家には必ず国民性という個性があるように、学校には校風があります。本学も建学の精神を遵守し、同窓生、御父母、教職員等の支援や協力によって、期せずして成果が上がり、校風は確立してまいりました。後につづく入学者は安心して、これに従うことになります。新年度に向かって力強く第一歩を踏み出すのは、伝統の上に成り立つものです。

大学30年・短大50年を節目として、更に建学の精神を心に刻み、全人教育への誓いを新たにして今後の飛躍につなげたいものです。

「北条鹿島まつり(大しめ縄張り替え体験)」に留学生が参加

5月4日(水)、松山市北条の鹿島で開催された「北条鹿島まつり(大しめ縄張り替え体験)」に、韓国と台湾からの留学生14名が参加し、地域の方々と交流を深めました。



読売ジャイアンツ(三軍)VS愛媛マンダリンパイレーツの試合運営に学生が協力

5月20日(金)、坊ちゃんスタジアムで聖カタリナ大学・読売新聞の冠協賛試合「読売ジャイアンツ(三軍) VS 愛媛マンダリンパイレーツ」が開催され、約1,300名の皆様にご来場いただきました。

また、健康スポーツ学科の学生が試合運営に関わる様々な役割を担当させていただきました。

- ①スタジアムの入場口で入場整理・チケットもぎり
- ②スタジアム場内でファールボール等の安全喚起
- ③ゴミの回収・分別
- ④ボールボーイ・ボールガール
- ⑤場内アナウンス(MC体験等)
- ⑥来場者イベントの補助、グッズ販売の補助
- ⑦取材体験(試合中、試合後に読売新聞記者に帯同)

学生にとっては普段経験することが出来ない試合・イベント活動の運営サポートを行ったことにより、試合運営がどのように成り立っているのか理解する良い社会体験となりました。



聖カタリナ大学剣道部 福本さんが全日本女子学生剣道選手権大会に出場



5月22日(日)愛媛県武道館において、第48回中四国女子学生剣道選手権大会が開催されました。

本学剣道部の福本愛子さんがベスト8に入り、7月2日(土)に日本武道館で開催された第50回全日本女子学生剣道選手権大会に出場しました。

軟式野球部が2年連続の準優勝

本学、軟式野球部が四国地区大学軟式野球連盟の平成28年度春季リーグ戦において2年連続の準優勝を飾りました。



5月22日(日)にレクザムスタジアム(香川県営野球場)でおこなわれた愛媛大学との優勝決定戦(決勝戦)では、3対4と1点をリードして迎えた最終回(9回)に逆転を許し、悲願であった春季リーグ戦の優勝と全国大会への出場は叶いませんでした。2年連続の準優勝を成し遂げました。

サッカー部監督の就任について(就任会見)



6月1日(水)に株式会社愛媛FCと業務委託契約を締結し、末岡龍二氏(愛媛FC所属コーチ)がサッカー部の監督に就任いたしました。6月9日(木)には愛媛FC代表取締役社長 豊島吉博氏と学長 ホビノ・サンミゲルが出席し、新監督の就任会見を行いました。

サッカー部の今後の躍進にご期待ください。

【聖カタリナ大学サッカー部 概要】

本学サッカー部は、平成24年4月に創部され、20名程度の少人数の部員で実績を上げ、創部4年目の平成28年度から四国大学1部リーグ(5チーム編成)への昇格を果たしました。

- 平成25年度中予サッカーリーグ3部優勝
- 平成26年度中予サッカーリーグ2部優勝
- 平成27年度中予サッカーリーグ1部優勝
- 平成27年度秋季四国大学サッカー選手権大会(2部)優勝
- 平成28年度愛媛県リーグ2部昇格
- 平成28年度四国大学1部リーグ昇格

第14回ボランティアウィーク 一般公開イベント開催



7月16日(土)に第14回ボランティアウィーク一般公開イベントが開催されました。

テーマ「つながりー地域と大学を未来にー」のもと新たな「つながり」を築くことができました。

ボランティアウィーク中に開催した講演会でのシドニーパラリンピック金メダリスト加藤作子氏との感動の出会い、一般公開イベントの映画「MARCH」の愛媛FCと南相馬の子どもたちによるドキュメント上映は、これからも続く愛媛と東北被災地との絆を感じました。

ボラセン広場やユネスコ展示、フリーマーケットやバザー、そして国体ボランティアブースからは、みきゃんとダークみきゃんが現れ、会場を盛り上げてくれました。

ボランティアウィーク中の短期募金を始め、多くの地域の方々にお越しいただき、多額の募金(¥158,186)をいただきましたことをお礼申し上げます。ご協力ありがとうございました。

キャリアデザインで ライフデザイン出張講座を開催

7月21日(木) キャリアデザイン(聖カタリナ大学)の授業で、愛媛県とNPO法人ワークライフ・コラボの主催によるライフデザイン出張講座が開催されました。

ライフデザイン出張講座とは、愛媛県地域少子化対策化事業「えひめの次世代を担う親子づくり推進事業」の一環で、急速に進む少子化に対応するため、近い将来、親になる可能性のある大学生を対象に、自らのライフデザインを考え、将来、結婚して家庭を持ち、子育てをイメージする機会づくりを行うことを目的とする講座で、愛媛県とNPO法人ワークライフ・コラボが連携して実施している出張講座です。

講座では、最初にNPO法人ワークライフ・コラボのスタッフよりライフデザイン事業等の説明があり、その後、愛媛トヨタ自動車(株)採用・人事育成担当・和泉智子氏と石田クリーニング(株)取締役常務・西田晃一氏を講師にお招きして、就職や結婚などの人生の転機、仕事と家庭生活との両立などについてプレゼンテーションが行われました。



第67回四国地区大学総合体育大会 (四国インカレ)について

第67回四国地区大学総合体育大会が、6・7月に高知県で開催されました。

本学からは10種目に約120名が参加し、そのうち剣道(女子団体)が準優勝、水泳(個人/健康スポーツ学科1年 時本里衣さん)が200M自由形で準優勝、400M自由形で3位に入賞するなど、優秀な成績をおさめました。



卓球部 長谷川裕也君(保育学科1年)が 全国大会優勝



8月8日(月)～11日(木)に来賓として高円宮妃殿下久子様、絢子女王殿下をお招きし、第51回全国私立短期大学体育大会(主催:全国私立短期大学協会、後援:スポーツ庁、東京都)が東京体育館、小金井市総合体育館において開催されました。

本学学生の長谷川裕也君が卓球男子シングルスにおいて優勝を飾りました。

松山まつり「野球拳おどり」で準優勝を受賞



8月13日(土)に開催された第51回松山まつり「野球拳おどり」団体連の部で、聖カタリナ学園連が準優勝を受賞しました。当日は聖カタリナ学園高校(男女共学)と聖カタリナ大学で協力し、練習した成果を発揮することができました。皆様の熱いご声援ありがとうございました。

また、まつこいパークにおいても8月12日(金)～14日(日)に聖カタリナ学園(高校・大学)として射的とわなげ大会のチャリティーブースを出店しました。3日間とも、年齢問わずたくさんの方々にご来場いただきました。

なお、この射的とわなげ大会の収益は、松山市社会福祉協議会を通して「まごころ銀行」と「熊本地震災害」に全額寄付(¥120,050)させていただきました。

ご来場いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

聖カタリナ大学 「看護学科の新設」(平成29年4月)について

平成28年8月31日(水)付で文部科学大臣から設置認可を受け、平成29年4月より聖カタリナ大学人間健康福祉学部看護学科を設置することが正式に決定しました。

また、8月26日(金)に愛媛県庁内で記者発表を行い、看護学科長に就任予定である関谷由香里教授より就任の挨拶がありました。

学科名称: 看護学科
開設時期: 2017年(平成29年)4月
入学定員: 80名(男女共学)
学位名称: 学士(看護学)
修業年限: 4年
取得資格: 看護師国家試験受験資格、
保健師国家試験受験資格(選択制)

キャンパス: 伊予鉄道松山市駅に隣接した「聖カタリナ大学松山市駅キャンパス(松山市永代町)」を新設。



聖カタリナ大学剣道部女子が 全日本女子学生剣道優勝大会に出場決定

9月4日(日)岡山市総合文化体育館において、第43回中四国女子学生剣道優勝大会が開催されました。

本学剣道部女子が第三位に入賞し、11月に愛知県春日井市で開催される第35回全日本女子学生剣道優勝大会の出場が決定しました。

また、本学の菅有紗さんが優秀選手賞を受賞しました。



『留学生交流事業(鹿島清掃&バーベキュー)』 に留学生が参加



9月24日(土)、松山市北条の鹿島で開催された北条地区まちづくり協議会主催の『留学生交流事業(鹿島清掃&バーベキュー)』に、韓国と台湾からの留学生18名と日本人学生2名が参加しました。

鹿島の清掃をした後、バーベキューやチーム対抗ゲームで盛り上がり、地域の方々との交流を深めました。

軟式野球部が悲願のリーグ戦「優勝」を達成！

軟式野球部が四国地区大学軟式野球連盟平成28年度秋季リーグ戦において初の優勝を飾りました。

10月1日(土)に津田球場(香川県)でおこなわれた香川大学との優勝決定戦では、投打に相手を圧倒し、悲願であったリーグ戦の優勝を成し遂げました。

本学は四国代表(第一代表)として、11月4日(金)から神戸市で開催される第33回西日本大学軟式野球選手権大会に出場します。

今後とも熱いご声援をお願い申し上げます。



「お父さん先生やなあ。」

保育学科 松谷 和俊

3歳児クラスのはる君(仮名)が、満面の笑みを浮かべながら、初対面の私にそう言った。子ども特有の純粋できれいな心に、私はいつも救われてきた。しかし「先生」と呼ばれる職業に就くまでに、私は大いに悩み、苦しんできた。

教育学部を卒業した私は、22歳という若さで「先生」と呼ばれる職業に就くことにはどうしても抵抗があった。私は「先生」と呼ばれるほど、できた人間ではない。心のどこかにそういう思いがずっとあった。だから「先生」にはならず、色々な職業を転々とした。公共図書館で児童書を担当したこともあれば、県立児童館で児童厚生員をしたこともある。歯科医院に勤務し、歯科診療の補助をこなしつつ、子どもの保育をしたこともある。「先生」と呼ばれる職業には抵抗はあったものの、子どもは元来好きだったので、気が付けば子どもと接する職業に自然と就いていた。

転機が訪れたのは、32歳の夏のことである。この時、教育学部を卒業してすでに10年が経過していた。もう若くはないし、残りの人生もそれほど多くはない。そう考えると突然、知識欲が頭をもたげてきた。と同時に、これからの未来を生きる子どもたちに、私が持てる全てのことを伝えていきたい、いわば未来に投資したいと思うようになってきた。日増しにその気持ちが高まった私は、大学院修士課程に進学することを決意した。教員免許状はすでに所持していたので、すぐにでも幼稚園や小学校に勤めることは可能ではあったが、もう一度幼児教育を学び直す必要があると、そう判断したのである。

地元徳島県にある、教育大学の大学院で、幼児教育を専門的に学ぶことができると知った私は、修士課程に進学した。



子どもたちに大人気の、折り紙で作ったかぶとむしと手裏剣。

周囲は修士号や、専修免許状、あるいは3年かけて幼・小・中・高・特別支援教育の免許状を取得することを目的に進学してきたという院生が多かったが、私は修士号や、専修免許状などには全く興味がなかった。私がしたいのは幼児教育の勉強、ただそれだけであった。

学費・生活費などの必要経費は、これまでの貯金ですべてを賄った。わずか2年間しかない大学院生活の貴重な時間を削られるのが惜しかったので、アルバイトはしなかった。やりたいことを時間を気にせず、好きなだけやる。文献を何時間読んでいようと、誰からも咎められることはない。毎日が充実していた。学部時代は度々講義をさぼっていたが、大学院では発熱など、よほどのことがない限り講義を休まなかったし、毎回の予習・復習も欠かさなかった。修士2年になると講義はなく、ゼミのみとなるのだが、私は貪欲に学部の授業も受講し、19歳、20歳の学部生と一緒に肩を並べて勉学に励んだ。

授業がない日は、附属図書館の開館から閉館(8:45～22:00)まで勉強した。研究に必要な文献等を合わせると、大学院修了までに、300冊以上の本を読了することができた。修士課程の集大成である修士論文は、指導教員の多大なお力添えもあり、納得のいくものができ、修了直前の2月に行われた学内研究発表会でコース代表として自身の論文を発表する機会を持たせていただいた。2年間で多くの学びを得ることができた私は、今なら自信をもって子どもたちの前に立てると、そう感じるまでになっていた。

大学院を修了した私は、地元の小さな田舎町にある幼稚園に就職した。勤続35年のベテランの先生と一緒に、5歳児27名の子どもたちと生活を共にすることになり、希望に胸が膨らんだ。発達障害を抱える子ども、子育ての悩みを抱える多くの保護者。幼稚園教諭として初めて目の当たりにする現実は一筋きりだったが、多くの経験知を得ることができた。その後、保育所にも勤務することになり、ここでは3歳児クラスの担任を任されることになった。その時に出会ったのが、冒頭に出てきたはる君である。

保育士・幼稚園教諭には様々な役割がある。子どもから見ると私は先生である一方で、友達でもあり、仲間でもあり、父親・母親でもあり、気のいいおじさんでもある。私はクラスの子どものことを、自分の子どものように思いながら毎日を過ごしてきた。「子どもを個として尊重する」。これは、幼児教育の大家である倉橋惣三の研究を通して学んだことであるが、迷った時、悩んだ時はいつもそれを思い出して援助をした。

現在は、未来の保育者を養成しつつ、研究に励む毎日を送っている。22歳の頃、あれほど避けていた「先生」という職業に就いているのだから、人生何かがどうなるのか分からない。今後、さらに研鑽を積んで「先生」と呼ばれるに相応しい人格者、研究者となれるように日々努力を重ねていきたい。

Catherine ゼミナール インタビュー

人間健康福祉学部

丸山 裕司ゼミ



Q 1 : ゼミのテーマを教えてください。

丸山ゼミのテーマは、とても幅が広いです。私自身、多岐に渡る分野に携わってきたことからテーマは限られた範囲ではなく、健康づくり全般について行っています。中でも運動による健康づくりの方法を中心に学習しています。私が理学療法士ということもあり、健康増進（一次予防）のみならず、適切な医療と合併症対策（二次予防）、リハビリテーション（三次予防）も含めての健康づくりを意識してゼミを展開しています。ゼミでの学習の成果として、3年次に健康運動実践指導者の資格取得を目指しています。4年次は、健康運動指導士や教員など卒業後の進路を視野に入れ、学生各々がテーマを定めています。丸山ゼミでは、学生が主体的に学習に取り組めるよう工夫しています。

Q 2 : ゼミの特徴を教えてください。

学習内容が机上だけの理論で終わらないように実践的な取り組みも積極的に行っています。月に1度地域に出向き、学生が指導者となって高齢者を対象に運動指導しています。今後も日本の人口の高齢化は著しい増加が予測されていることから、特に高齢者を対象とした運動指導を学生のうちから身につけることは、卒業後に役立つと考えています。学生は、普段、同年代の人と過ごす時間が多くなりがちです。基本的な運動指導の技術も重要ですが、社会人としての地域の方との話し方や接し方を学ぶことが学生にとっては良い勉強になると考えています。学生には卒業後、分野が何であれ、有言実行ができる人間に育ってもらいたいと願っています。

丸山 裕司ゼミはこんなゼミ

健康スポーツ学科3年 坂田 茉優、山崎 花

私たちのゼミは、ブルースリーに憧れている丸山先生、おしゃべり好きな女子、キャラの濃いメンバーが揃った男子が先生のおやじギャグを華麗にかわしながらみんなで楽しく活動しています。健康運動実践指導者、健康運動指導士の資格取得のために、丸山先生は笑いながら私たちに大量の課題を出します。それは、私たちのことを想ってのことなのでしょう... 私たちは、この丸山先生の想いを受け止め、真剣に取り組んでいます。また、地域に出向き、高齢者を対象に運動指導をすることで、参加者とのコミュニケーションの取り方や、指導方法を学び社会に役立つような実践的な能力を身に付けています。

勉強だけでなく、学祭での出店、旅行の計画など盛りだくさんにイベントを考えています！学祭では、職人並みのフライドポテトを作って、莫大な利益を上げ、その収益で皆と熱く夢をカタリながら友情を深めたいと思っています。旅行では、スノーボード合宿と卒業旅行を計画中です。丸山先生がスノーボードの腕がプロ並みと言っており（多分冗談...）、手取り足取り教えてもらいたいです。先生の滅多に見られない機敏な動きを目に焼き付けて帰りたいと思います。この丸山ゼミの出会いや思い出が、一生の宝になると願って今日もまた問題を必死に解き続けています...



Q 3 : ゼミのスタイルを教えてください。

学生時代、遊ぶこともとても意義ある社会勉強と考えています。そのため、遊ぶときは遊ぶ、勉強するときは勉強するというメリハリをつけてゼミでは授業を行っています。丸山ゼミは、ゼミ生が1学年13名と大所帯ですが、学生一人一人を一度しかない人生の中で出会えた一人の人として接したいと考えています。ゼミの初回は、今までの私の経歴なども含めて改め、学生に自己紹介を行い、私らしくなくちょっぴり熱く学生に語ります。ゼミ生には、通常授業では伝えきれない実体験に基づく話をしたり、学生自らが経験することで実践的な力を身につけたりすることを大切にしています。最近では、学生に冗談を言っても男子学生は軽く微笑み、女子学生はあえて無反応といった非日常的な時間が流れることもあります。それはそれで悪くない時間です。ゼミは、普段の授業とは異なる貴重な時間だと思っています。授業というよりは、人生の先輩として学生へのメッセージ性が際立ったスタイルかと思います。しかし、こちらの意図がなかなかうまく伝わらないのが大学生ですので、この次の「ゼミはこんなゼミ」にゼミ生がどんなコメントを記すか楽しみです（笑）



Challenge to change

～変化への挑戦～

就職課長 井上 尚幸

学生の皆さん、変化への挑戦をしていますか？

1年前の自分から確実に成長していると自信を持って断言できますか？

リスクを考えず、変化への挑戦をしなかったとしても、私達を取り巻く環境はそれとは関係なく日々変化しています。進化論で有名なダーウィンは「強い者、頭の良い者が生き残るのではない。変化する者が生き残るのだ」という言葉を残したと言われています。

周りの環境が変化しているのに、自分がそのままである事はリスク以外の何者でもありません。

就職課では、学生の皆さんに「変われ、変われ、もっと変われ」ということを言い続けてきています。

人に言われるからでなく、自分自身のために、自ら環境を変えてみることも必要です。

さて、一般企業の採用活動も後半戦です。本学は夏休みで学生の出入りも少なくなっております。また、夏休み返上で会社訪問をしている学生やきちんと夏休みを取っている学生と色々ですが、全体的には学生の行動が遅いと思われます。

昨年度は最終就職率が大学97.0%、短期大学部は100%とともに過去最高という数字でしたが、ここ2～3年は内定率だけでなく、内定先の内容も変わってきています。

今年度前半戦の本学学生の就職戦線の特徴として以下のようことが挙げられます。

第一に、3月から各合説に積極的に参加し、早い段階(3月末～4月)で内々定をもらって余裕を持って第一志望の企業に挑戦し、地場大手の企業で見事に内々定を勝ち取った学生も多数出てきております。ただ、採用選考の段階で、地場企業は昨年以上に充分な時間を掛けたことで、学生のエントリー件数は昨年の半分以上になったということも事実です。来年度も今年度と同じ採用スケジュールが展開されることが決定しておりますから、学生の皆さんは企業研究をしっかりと

した上で、本番の3月を迎えることが必要となります。また、内々定先についても、昨年以上に、銀行や信用金庫をはじめ地場大手企業からの内々定をもらっています。当然のことながら、内々定先のネームバリューよりも、学生の目指したい業種、職種での内定奪取のために、就職課全員が学生の皆さんをサポートしておりますが、来年度以降、現3年生にも大きく影響するであろうと思われます。

第二に、大学に直接送られてくる求人数は8月末現在大学において昨年比117%、短大においては113%であり、学生は多くの求人の中から数多く選択できる状況であります。その結果8月末の内々定獲得者数は大学では昨年同期比167%、短大においては昨年同期比同数と非常に高い数字で推移しています。そして、本学においても重複内定者が昨年同様に増加している状況にあり、結果として、内々定辞退ということになり、企業側は二次募集、三次募集を実施している現状となっています。福祉系を検討している大学4年生や短大生の多くは、夏休みを終えたこれからが本番となります。

さて、第一の要因の中で、来年度も今年度と同じ採用スケジュールであるということに触れましたが、それについて簡単に説明しておきます。先日、経団連は加盟している企業に対して、大学3年生の3月1日就活スタート、6月1日選考開始、10月1日正式内定と決定しています。一般企業を検討している学生の皆さんにとっては、就活に入るまでに十分な準備(公募型インターンシップへの積極的な参加、企業研究、自己分析など)を要することが必須ということです。

そのためには、自分自身をしっかりと見つめ直して、より磨きをかけることが大切です。

そして、何事に対しても粘り強く決して諦めない強いチャレンジ精神で頑張りましょう。

「変われ 変われ もっと変われ !!!」

Catherine クラブ紹介

サッカー部

聖カタリナ大学サッカー部は、平成27年度の四国大学2部リーグにおいて優勝し、平成28年度から1部リーグ昇格を果たしました。平成24年度創部とまだまだ歴史の浅いチームですが、聖カタリナ大学のサッカー部の歴史を彩るために選手・スタッフ一丸となって活動しております。現在は四国大学1部リーグと愛媛県社会人リーグに所属し一つでも多くの試合に勝てるよう内容にもこだわり戦っています。普段は主に大学敷地内のグラウンドや北条スポーツセンターでトレーニングを行っています。聖カタリナ大学は愛媛FCと活動

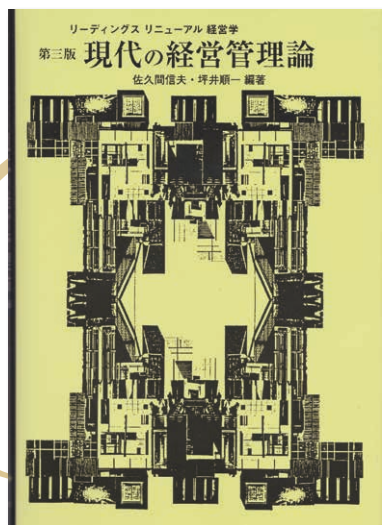


協力提携を結んでおり、本年度6月から末岡龍二監督(愛媛FC所属コーチ)のご指導のもと、より高いクオリティーのサッカーを目指して日々活動しています。スローガンとして「RESPECT」を掲げ、サッカーだけではなく人間性の向上やサッカーに本気で取り組める環境、サポートしていただいている方々に感謝し活動を行っています。また、チームメイト同士でも先輩、後輩の仲がとても良く、何でも言い合える環境なので是非たくさんの入部を心待ちにしています。

健康スポーツ学科 3年 木田 航矢

第三版 現代の経営管理論

芳地 泰幸 (聖カタリナ大学講師) : 学文社 2016年



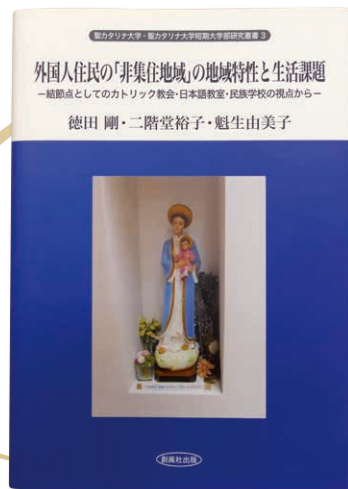
皆さんは『経営管理』という言葉にどのようなイメージを持っているでしょうか？ トップ (経営者) がおこなうもの、お金儲けのためのもの、堅くて難しそうといった感じでしょうか？ 経営管理の視点は、企業 (営利組織) や経営者だけのものではありません。経営管理について学ぶことは、スポーツチームや医療・福祉、大学、NPOなどの非営利組織においても組織運営やマネジメントに関する有益な示唆と深い洞察を与えてくれます。

本書は現代の組織が抱える諸問題を解決するために7名の研究者によって執筆された『経営管理論』の専門書です。具体的には大きく4つの分野 (計13章) から詳しい解説がなされています。私は、第8章「リーダーシップ論の史的展開 (158-181頁)」と第12章「パワーの枠組みと諸理論 (238-253頁)」の執筆を担当しました。第8章では、これまで経営学の研究領域において蓄積されてきたリーダーシップ理論を「特性理論」、「行動理論」、「状況適合理論」に分類し、それぞれの代表理論を中心に解説してあります。また、昨今の激変する経営環境への適応や企業の変革など、組織の外部環境へ着眼した変革型リーダーシップについても解説を加えました。そして第12章では、様々な事象・場面において生起する“パワー”概念について、これまでの研究動向や諸理論を整理するとともに、パワーを効果的に行使するためのポイントについて「個人間」、「組織内外のサブユニット間」、「組織間」の3つの分析視角から解説しています。

本書は、専門書であるものの経営管理論を学ぶ学生から実務家の方まで、組織に関わる全ての方に読んで頂きたい一冊に仕上がっています。是非、手に取っていただき、身近な組織の経営管理やマネジメントに役立ててほしいと思っています。

聖カタリナ大学・聖カタリナ大学短期大学部研究叢書3 外国人住民の「非集住地域」の地域特性と生活課題 ー結節点としてのカトリック教会・日本語教室・民族学校の視点からー

徳田 剛 (聖カタリナ大学教授) : 創風社出版 2016年



本書は、地方に暮らす外国人住民の生活状況と日常的なつながりについて、地域社会学の視点から論じたものです。これまでの日本の移民・エスニシティ研究の多くは、大都市の中心部のエスニックタウンや南米日系人の集住地域に焦点を当ててきました。しかし、リーマンショック後に南米日系人人口が大きく減少し、地方では少子高齢化への対応で海外からの技能実習生や結婚移住女性が増加している現状から、外国人住民が分散して居住し、日常生活において孤立しがちな「非集住地域」において、いかに外国人住民の生活支援や多文化共生の地域づくりを進めていくかを考えていくべき時期にきています。

本書では、これまでの日本への外国人住民の流入と定住に関する先行研究を整理したうえで、地方での多文化共生の進め方についての考察を行っています。また、第1章から第3章では、それぞれの著書による「フィリピン系住民とカトリック教会」「ベトナム人技能実習生と地域の日本語教室」「愛媛の在日コリアン住民と民族学校」についてのフィールドワークの成果をまとめています。地元の愛媛県でも住民構成における多国籍化は徐々に進んでおり、思った以上にたくさんの外国から来住者が暮らしておられます。そうした足元のグローバル化の現状と課題を知る上でも、本書をぜひ手に取っていただければ幸いです。



学校法人 聖カタリナ学園

聖カタリナ大学

カタリナひろば vol.29 No.1

編集・発行

広報委員会

〒799-2496 愛媛県松山市北条660番地

TEL (089) 993-0702 (代)

kouhou@catherine.ac.jp